

昭和58年度

舢倉島耳鼻科検診報告

伊藤 英章*

日時：昭和58年9月17・18日

場所：石川県輪島市舢倉島

参加者：石川県立中央病院耳鼻科医師 1名
同 看護婦 1名
石川県庁厚生部衛生総務課 2名
舢倉島診療所

対象：島民32名（うち海女26名）

目的：日常特殊専門医療の機会に恵まれない離島の住民に対し耳鼻いんこう科診療を実施し、離島住民の健康確保を図る。

結果：31名中以下の疾患(患者数)を認めた。

- 中耳炎 3人
- 急性外耳炎 8人
- 慢性外耳炎 9人
- 副鼻腔炎 5人
- 鼓膜炎 1人
- 耳管狭窄 2人
- 鼻茸 3名
- 扁桃肥大 1名
- 声帯ポリープ 1人

I はじめに

舢倉島は素潜りで海底のアワビ、サザエを採る海女の島であり、毎年7月～9月は、当診療所に眼・耳の主訴を訴える患者が急増する。耳症状に関しては住民サイドで自衛の策として、抗生剤の水薬を購入し、綿棒等で塗布している。50名近くの海女のうち、大部分の者は耳に関する訴えを持つが、そ

* Hideaki Ito

1980年 自治医科大学卒

現在輪島病院に勤務

(連絡先) 〒928 石川県輪島市河井町16部 1

輪島病院

のほとんどの人が「職業病」の一種としてあきらめており、余程重症になるまでは仕事を止めようとしないうである。一方診療所医師(即ち著者)の告白では、抗生剤とステロイド軟コウをつけ、鎮痛剤の内服をさせているだけであり、けっして鼓膜を中心とした所見を十分にとっているわけではないのである。

今回離島専門医検診の一環として県立中央病院耳鼻科医師による耳鼻いんこう科検診を実施した。海女に対するアンケートの結果と合わせて報告する。

II 検診プロフィール

日時：58年9月17日 午後2時～9時
9月18日 午前9時～11時

場所：舢倉島診療所

主訴の有無にかかわらず、耳鼻咽喉頭を診察し、鼓膜所見をスケッチした。

III 結果、ならびに感想

〈表I〉年令・性別

受診者内訳

男性	年代	女性
1	～20	1
0	21～30	3
0	31～40	3
1	41～50	7
4	51～60	10
0	61～	2
6	合計	26

男性6名、女性26名、計32名が受診した。(表I) 男性6名のうち1名は4児の小児であり、他の5名は40～50才代である。女性26名(17才～70才)はすべて海女である。受診者の中心は男性同様に40～50才代である。

〈表2〉 疾患別人数

疾患名	全受診者	海女26人
急性外耳炎	8人	8人
慢性外耳炎	9人	9人
中耳炎	3人	3人
副鼻腔炎	5人	2人
鼓膜炎	1人	1人
耳管狭窄	2人	1人
鼻茸	3人	1人
扁桃肥大	1人	1人
声帯ポリープ	1人	0人

疾患別に検討すると(表2), 耳に関するものが外耳炎, 中耳炎を中心に23例/33例70%を占めた。特に海女だけに限定して考えると, 22例/26例85%という高い頻度になる。今回, 耳鼻咽喉科検診を実施して, 海女の島という特殊性から, その中でも, 耳に関する異常が多いことから明らかとなった。

〈表3〉 治療別内訳

抗生剤投与	5人
ステロイド軟膏塗布	10人
耳垢栓除去	18人
手術適応	4人
耳管通気	3人

治療別に検討した結果を表3に示す。一回だけの治療である為, 根治に程遠いことも事実であるが, 耳鼻科医師は表のごとく治療を指示した。反省すべきは, これだけ(延べ40名)の治療ニーズがありながら, 当診療所が把握していたcaseは2割程度であった点である。延べ40名のうち何名かは島外の医療機関にかかっていたこともあるが, 今回の検診で, 診療所医師の能力の問題から治療すべき疾病を持ちながら放置していた患者の数が多くいたことが明らかとなった。専門医検診, 特にこの島での耳鼻咽喉科検診は大いに意義のあるものであると云えよう。

診療所勤務の多科にわたる医療ニーズに答える為, 初期研修時に多科ローテートすることの重要性が強調されている。このような考え方は正論であろうが, 現実的対応として専門医による検診を合わせて実施すれば, 住民側のmeritはさらに大きくなる。

IV 海女の鼓膜所見について

〈表4〉 海女に対するアンケート結果

	若年群		高年群	合計 26人
	17-39才	7人	41-71才	
めまい	5人(71)		2人(11)	7(27)
耳鳴	3人(43)		9人(47)	12(46)
耳のかゆみ	5人(71)		13人(68)	18(69)
耳の痛み	5人(71)		9人(47)	14(54)
耳閉塞感	4人(57)		9人(47)	13(50)
聞えにくい	5人(71)		14人(74)	19(74)
異常なし	0		0	0

()内は%表示

今回の検診受診者のうち海女は26名であった。これらを対象に耳に関するアンケートを実施した(表4)。表のごとく6つの質問に答えてもらった。素潜りシーズン中であるせいも, 異常なしと答えた者はいなかった。若年群と高年群に分けて検討してみると, 耳のcomplaintについては, 若年群もほぼ同様の頻度であった。特に耳がかゆい, 聞えにくいといった訴えが70%前後の人に認められた。

〈表5〉 海女の鼓膜所見

豊田の文類(農村医学, 23巻, 15頁, 昭和49年)に準じた。

	若年群		高年群	合計 25名
	17-39才	7名	41-71才	
内陥	1人(14)		0人	1(4)
混濁	5人(71)		8人(44)	13(52)
粗米造	0人		3人(17)	3(12)
肥厚	0人		3人(17)	3(12)
穿孔	0人		4人(22)	4(16)
菲薄	0人		0人	0
異常なし	1人(14)		2人(11)	3(12)

()内は%表示

※ 外耳道屈曲の為, 鼓膜所見とれない者1名を除く。

これに対し鼓膜所見をこれら2群に分けて検討した(表5)ところ, 高年群において多彩な所見が認められた。即ち, 若年群では内陥1名, 混濁5名が認められたのに対し, 高年群では混濁8名, 粗米造3名, 肥厚3名, 穿孔4名といった変化が認められた。高年群の1名は外耳道屈曲の為, 鼓膜所見がとれなかった。これらの変化は, くりかえしおこった耳の炎症によるものと考えられることができよう。

V おわりに

海女の島での耳鼻科医師による検診は意義があり、今後も続けて実施してゆくべきである。できれば、鼓膜の写真を撮っておくのがよりよいと思われる。

鼓膜のスケッチも含め、今回の検診に絶大な援助を下された小森先生に感謝します。

(1983. 11. 15受付)